

本誌特別付録

ファイナル E1000SE



Photo : Nathan Wright (Qimage)

●形式： canal型 ●ドライバー： φ6.4mmダイナミック型 ●感度： 102dB ●インピーダンス： 16Ω ●ケーブル長： 1.2m ●プラグ： 3.5mmミニ ●重量： 15g ●付属品： イヤーチップ(SS・S・M・L・LL)

破壊力抜群！ エントリークラスイヤフォンの決定版！！

文：大塚康一 Yasukazu Otsuka

ビギナーにこそいい音で聴いてほしい

超高級なヘッドフォン/イヤフォンを手掛けるfinal(ファイナル)が、初めて自社ブランドのイヤフォンを発売したのは2009年のこと。以来『ヘッドフォンブック』誌のアワードで、上位入賞の常連であることは改めて申し上げるまでもないだろう。斬新なデザインと優れた音質で瞬く間に高い評価を得たわけだが、同時に低価格イヤフォンの開発に力を入れていることも広く知られている。そもそもファイナル創業以来のブランドコンセプトは「原理的に正しいことを徹底的に追求する」というシンプルなもの。それがよく活かされているのが、エントリークラスのイヤフォンともいえる。つまり価格設定やそれに伴う構造、材質などに制約があるなか、いかに高い性能や洗練されたデザインを実現するかが大前提となる。

そうしたファイナルのエントリークラスで、今注目されているのが「Eシリーズ」だ。9機種の豊富なラインナップが揃うシリーズの系譜に関しては他項に詳しいので、簡単に延べておくと……ビギナーにこそ良い

音を聴いてほしいという目的で開発。同クラスの走りであったAdagioやPiano Forteといったダイナミック型の流れを汲むEシリーズ第一弾としてE2000やE3000(4～5千円台)、その後、より音質・材質などをグレードアップしリケーブル可能なE4000とE5000(1～2万円台)が発売された。これらも十分にコストパフォーマンスの高い機種だったが、若い人からの「より入手しやすい価格のイヤフォンがほしい」という声に応え、コスト面など厳しい条件を克服しつつ、さらに安価な2千円台のE1000が開発されたというわけだ。

どんな再生機器でも満足できる音量と音質

E1000のドライバーユニットは、比較的小さな6.4mm口径のダイナミック型だ。しかも、この価格帯では異例ともいえる高い精度を誇る。部品と組み立ての精度が最重要というファイナルのポリシーに従い、ドライバーの開発や生産を行う自社工場を持つメーカーだからこそ、発揮できる職人技だろう。同社イヤフォンには振動板1基のシングルドライバー方式が多いが、筐体内の位相や気

流など音に関する要素を重視した巧みな設計によってクラス超えのクオリティを実現している。スペックによれば感度は102dB、インピーダンスは16Ωとある。ファイナル創立者の高井金盛氏は「スマホにつないだ時にも良い音で、大きな部屋でスピーカーをそこそこの音量で鳴らすぐらいの迫力が出ないといけない」と仰っていたが、まさにその通りの能力の良さ。どんな再生機でも満足できる音量が得られるというのは、見落とされがちだが重要な点だ。やたらに高いインピーダンス設定は、音量だけでなく音質を低下させる原因にもなる。ケーブルはOFC直出しで、この価格帯にしてはためて柔軟性のある平行線ケーブル。音質向上はもちろん、断線もしにくい。

また、ファイナルのイヤフォンはイヤチップも音に大きく影響することから、独自の構造や素材、形のものを採用している。E1000のチップは音導管部分と耳に触れる部分とで硬度が異なる2種類のシリコン素材を使っているが、前者はやや硬めのシリコンに溝加工を施すことで強度と柔軟性を、後者には柔らかいシリコンを採用して快適な着心地と高い遮音性を両立。しかもサイズが

SS・S・M・L・LLと5種類あるうえ、独自の「スウィングフィット機構」によってチップが左右に動くためどんな耳道の形にもジャストフィットし、開口部が当たって変形したりするのを防ぐこともできるのが特長だ。さらに、それぞれの組み合わせで軸色を変えており(濃いグレー&薄いグレー、赤&ピンクというように)、サイズの違いや左右を見分けやすくなっているのも便利だ。実際に装着してみると、最初にコツを掴んで馴染ませてしまえば以後は快適。長時間聴いていても、耳が痛くなったりすることはなかった。こうしたイヤチップの構造もあって音が直接鼓膜に届きやすく、クリアなサウンドの再生が可能となる。低音から高音までバランスが良く、特に中音域の密度が濃くてヴォーカル再生などにも最適だ。ちなみにEシリーズは、ファイナルのフラッグシップヘッドフォン「D8000」の研究開発で培った最新の音響工学と音響心理学を盛り込んでチューニングを行ったという。ライブのような臨場感と迫力を味わえるのは、その成果だろう。

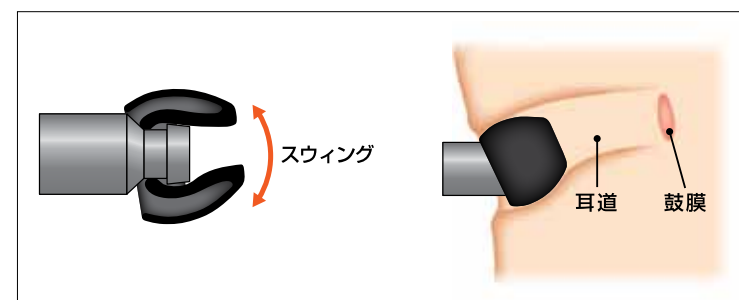
どんな再生機器でも満足できる音量

なお、ボディの材質はABSで、標準カラーはブルー、レッド、ブラックの3色。ちなみに今回本誌に付録として付く「E1000SE(スペシャル・エディション)」はレアなグリーンカラーだから、コレクターズアイテムにもなりそう(仕様は全く同じ)。

話は戻るが、E1000が2019年ヘッドフォンアワードでエントリークラス賞を受賞したのは記憶に新しい。それこそ老若男女を問わずビギナーに良い音で音楽を聴く楽しさを教えてくれ、かつ驚異的なコスパを達成した高音質イヤフォンの証明。今後もエントリー機の定番として、長きにわたって愛されていくに違いない。



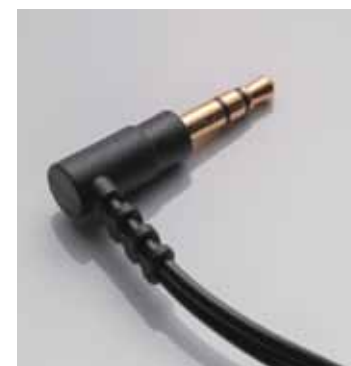
L/Rおよび、サイズによって色分けされたイヤチップ。SS・S・M・L・LLの5サイズを用意。



耳道の傾きにジャストフィットするスウィングフィット機構を採用したイヤチップ。



6.4mmダイナミック型ドライバーを採用。



太めのケーブルとL型端子。



市販モデルのE1000はブルー、レッド、ブラックの3種類のカラーをラインナップ。



本誌特別付録、E1000SEのパッケージ。



本誌特別付録はE1000SE本体と5サイズのイヤチップが同梱される。